

ザラツイン論争

——体制化した「六八年世代」への「異議申立」——

今 野 元

「低い発展度合の類型の人間たちが勝利し、これに対して精神、情操の営みの絢爛たる繁栄が、その担い手である人間社会が——いわばその社会組織や人種の資質ゆえに——勝利者である低い人間たちの生活条件に適応できないときに絶滅してしまうという事態を、人類の歴史は経験してきたのです。」(マックス・ヴェーバー『国民国家と経済政策』)¹⁾

「禁忌視というのは、必ずしも道徳的に非難に値するわけではありません。それは知的に誠実でないだけです。」(ヘルムート・シュミット)²⁾

1. ドイツ・エリート世界から出た移民批判

「多文化主義」的社會像を巡って論議が続くドイツ連邦共和国で、2010年8月末にまた新しい論争が勃発した。ドイツ連邦銀行理事ティロ・ザラツイン(1945年-)の新著『ドイツは自滅する』(Deutschland schafft sich ab)³⁾が、イスラム系移民について辛辣な批判を展開し、更に「六八年世代」⁴⁾の社會像そのものに疑問を投げかけたとして話題になったのである。曰く「ドイツに広まった所謂リベラルさが、しばしば無意識のうちに人々を六八年世代の伝統のなかで社會化し、あらゆる種類の人口政策をいかがわしいものとし、いかなる移住をもまずは好ましいものとしたのである。このサークルでは、移住を統制したり制限したりすることは、そもそも正当ではなく非道徳的だとされ、加えてドイツのドイツ的性格を維持しようとすることは、古臭い國民感情の表現だとされたのである。」⁵⁾ マスメディアには同書の店頭発売前から政党政治家や言論人のザラツイン批判が溢れ、8月30日のテレビ討論番組「ベックマン」では移民系、移民擁護の政治家や言論人が集結し、ザラツインを面と向かって糾弾

するという企画が組まれた（滞独中にこの事件に遭遇した筆者は、帰国前夜にミュンヘンでこの番組を視聴することができた）。またテレビでは、ザラツィンは金儲けのためにポピュリズムに走ったという非難も後を絶たなかった。だが同時にザラツィン擁護の議論も巻き起こり、インターネットでは「非公認ファン・サイト」まで開設されている⁶⁾。

現代ヨーロッパでは移民排斥論は珍しくないが、ザラツィン論争が大きな騒動に発展したのは、当人が成功した官僚政治家で、しかも社会民主党（SPD）の古参党员であり、通常の出版社から堂々と自説を出版し、政治家や言論人の一部からも賛同が寄せられたからだろう。「ナチズム」以来異民族問題に敏感なドイツ社会において、遂に中道左派政党员までが移民批判を始めたというのは、一見に値する現象である。しかも今回の論争で注目されるのは、ネット上などでの匿名のザラツィン擁護の多さが話題になったことである。

ザラツィン論争は、東西ドイツ統一以来徐々に増大した「六八年世代」の社会像への違和感が噴出した、これまでで最大の事件である。そもそも東西ドイツ統一は、「六八年世代」がその克服を訴えていた文化的・血統的アイデンティティの復権を意味するものであり、1993年には頻発する外国人排斥運動に押される形で、キリスト民主/社会同盟（CDU/CSU）、自由民主党（FDP）を与党とするコール黒黄政権と SPD とが妥協し、基本法で定めのある「政治的庇護権」の付与が制限されることになった。「六八年世代」が主要閣僚を占めるシュレーダー赤緑政権は、1999年の国籍法改定で属地主義原則を採用し、2000年には「グリーン・カード制」を導入して、「多文化主義」的社会への一歩を踏み出したが、2001年の米同時多発テロはその情熱に冷水を浴びせることになる。2001年発足の「ズースムート委員会」の討論を経て、2005年に漸く施行された「移民法」以来、ドイツ連邦共和国は「移民国」としての宿命を受け入れる代わりに、流入する移民の種類を限定し、「統合」という名で移民にドイツ社会への一定の「同化」を求めてきた。シュレーダー赤緑政権の末期に開始されたこの路線は、メルケル大連合政権（CDU/CSU・SPD）、メルケル黒黄政権にも基本的には受け継がれている。しかしムハンマド戯画事件やケルン・モスク建設事件など、相次ぐイスラム教徒との衝突は「統合」政策へ

の懐疑を掻き立ててきた。2005年選出の保守派ドイツ人教皇ベネディクトゥス一六世への熱狂はそうした心情の間接的表れであったが⁷⁾、このザラツィン論争では問題がより直接的に論じられることになったのである。本論は、このザラツィン論争の顛末を整理し、今後のドイツ「政治文化」への影響を考える試みである。

2. ザラツィン：帰ってきたマックス・ヴェーバー

ティロ・ザラツィンは1945年2月12日ゲーラの生まれで、「六八年世代」と同じ年代に属する。新自由主義者ザラツィンが「六八年世代」とどのような思想的関係にあったのか、どうして自由民主党やキリスト教民主同盟ではなく社会民主党に属しているのかなどは、ザラツィン理解において重要な点であるが、目下明らかになっていない。医師だった父は出征して俘虜となり、地主の娘だった母は戦争末期に西プロイセンから逃れ、チューリングゲンでティロを産み落とした。ティロはレックリングハウゼン（ノルトライン＝ヴェストファーレン州）で生育し、人文主義ギムナジウム「ペトリナム」を卒業している。ザラツィンという家名はドイツでは珍しいが、中世末に南仏を根拠としていたサラセン人海賊が土着し、やがてユグノーとなってフランスから追放され、ジュネーヴ、バーゼルを經由してヴェストファーレンに移住したのだという。またティロの祖母にはイギリス人もイタリア人もいられると言われる。ティロは、自分の顔立ちにはスラヴ系の特徴がある、若いころはトルコ人よりトルコ的に見えたとし、自ら「雑種」を名乗っている。このためドイツに統合された移民としての背景を自覚するザラツィンが、自ら移民の統合不可能性を論じることを皮肉とする声も上がっているが、逆に統合された移民だからこそ、統合意欲の低い移民には批判的という面もあるのかもしれない。なおティロはプロテスタントだが、26歳で教会から脱退している。ティロの妻は地主の娘、小学校教師で、ケルンのトルコ人が多数派を占める地域で教鞭をとっていたという⁸⁾。

ティロ・ザラツィンは財務官僚として、輿論の動向や政権交代に直接左右されず上昇していった。ザラツィンは大学入学資格取得と兵役のあと、1967年から1971年までボン大学で経済学を学び、1974年に経済学で博士号を取得し

た。1973年ザラツィンはSPDに入り、フリードリヒ・エーベルト財団の研究員となった。1975年から1991年までザラツィンは主に連邦財務省で勤務し、その間1978年から1981年までは連邦労働省に在籍した。東西ドイツ統一後、ザラツィンは信託庁での勤務を経て、ラインラント＝プファルツ州財務次官になり、更にはドイツ鉄道理事へと転職した⁹⁾。なお官吏としてのザラツィンの評判は上々で、早朝に出勤して昼食は質素であり、部下に大声を上げることもなく、その意見を聞く姿勢があるというのが、統計に詳しく相当な自信家なため、周囲からは敬遠されることがあるらしい。ザラツィンは機会を捉えて部下をレストランに招待するが、勘定は各々、つまり自己責任にするという¹⁰⁾。

ティロ・ザラツィンはすでに1970年代から、新自由主義経済政策の論客として頭角を現していた。石油危機を契機とする経済不振のなか、ザラツィンは社会政策の抜本的削減による財政負担の軽減を一早く訴えた。しかし「社会国家」理念がなおも強固であった1970年代、弱者保護思想の伝統的担い手であったSPD内では当然この先駆的新自由主義者への風当たりも強く、青年社会主義者団(JUSO：社会民主党青年部)団長だった同世代のハイデマリー・ヴァーチョレク＝ツォイル(1942年－：のちにシュレーダー赤緑連邦政権からメルケル大連合政権まで連邦経済協力開発大臣)がその批判の急先鋒であった¹¹⁾。

新自由主義者の常として、ティロ・ザラツィンはアメリカ合衆国の崇拜者になっていった。ザラツィンの熱狂するアメリカは、キング牧師のそれではない。エスニックな並行社会がある点では、彼は寧ろアメリカに批判的である¹²⁾。ザラツィンが感激するのは、「まさに天才的」な「国制」、特に大統領制の指導者選抜機能であり、これは古代ローマやかつてのプロイセンに匹敵するという。「人民に選出された大統領は強大です。でも二院制により、独裁者紛いの者には成り上がることが決して出来ないのです。」¹³⁾

実務家ティロ・ザラツィンが広くドイツ輿論の注目を浴びようになったのは、彼が2002年にベルリン市長クラウス・ヴォヴェライト(1953年－)のもとで財務担当市参事会員(ベルリン州の「財務大臣」)に就任したときのことである。「節約ランボー」と呼ばれたザラツィンの大胆な緊縮財政は、ベルリ

ン市政の負債を軽減したとして評価を得たが、彼の人間観への批判もすでに出始めていた。当時のザラツィンの有名な台詞に、「貧乏人はセーターを着ろ」というのがある。これは生活保護を受け取るような貧しい人間なら、寒い時期には厚着をして燃料代を押さえるような工夫をするべきだという趣旨である。こうしたザラツィンの発言からは、そもそも人間は自立した個人であるべきで、貧困に関する具体的個人の自己責任を問わないのは人間を墮落させ、財政を破綻させるだけだという、自由主義的人間像が見て取れる。こうしたザラツィンの発言が、貧困を個人ではなく専ら社会の「構造」の問題とする平等主義者の神経を逆撫でしたことは言うまでもない。とはいえザラツィンは、基本的には7年に亘る任期を成功裡に終えて、2009年にドイツ連邦銀行理事へと転職していった¹⁴⁾。

ドイツ連邦銀行理事となったティロ・ザラツィンは、ここで俄かに移民問題に関して注目されるようになる。2009年9月30日に『レトル・アンテルナシオナル』第86号に掲載されたインタビューのなかで、彼はこう言明した。「私は国家によって生き、この国家を拒絶し、子供の教育の面倒をきちんと見ず、絶えず新しい小さなスカーフの女の子を生みだしているような人々を、認める必要はないと思っています。これはベルリンの70%のトルコ系住民、90%のアラビア系住民に言えることです。彼らの多くは統合を望んでおらず、大手を振って生きています。更に彼らは全体国家の精神構造としては攻撃的で古臭いものを涵養しているのです。」¹⁵⁾このインタビューでザラツィンはルビコン川を渡り、公然たる移民批判へと踏み切った。この発言が契機となって、ドイツ連邦銀行総裁アクセル・ヴェーバーやSPD党首ジグマール・ガブリエルをも巻き込む騒動へと発展したのである。なおザラツィンはここで、旧東ベルリンについても辛辣な描写をし、ロシア系ドイツ人なども問題視しているが、この点はまるで批判されなかった¹⁶⁾。

だがティロ・ザラツィンの移民批判には徐々に連帯する声が上がった。日刊紙『ヴェルト』は10月2日にザラツィン寄りの論調を取った。更に連邦ドイツ工業同盟元会長ハンス＝オラフ・ヘンケル、ユダヤ人文筆家ラルフ・ジョルダーノらが、ザラツィン擁護の声を上げた。10月9日にはドイツ・ユダヤ

人中央評議会事務総長のシュテファン・クラーマーが、ザラツィンをヒトラー、ゲッベルス、ゲーリングに譬える発言をしたが、批判を受けて4日後には撤回を余儀なくされた。日刊紙『ビルト・アム・ゾンターク』は10月11日、質問を受けた者の51%がザラツィンに賛成したとのアンケート結果を発表した。結局ザラツィンは連邦銀行での担当分野のうち「現金」を断念することになり、騒動も終結に向かう。11月に入ると、哲学者ペーター・スローターダイク(1947年-)が政治雑誌『ツイツェロ』でザラツィン批判者を批判し、元連邦宰相ヘルムート・シュミットも『ツァイト』で旧知のザラツィンを擁護した¹⁷⁾。

SPD ベルリン支部は2009年の騒動を受けて、ザラツィンを除名処分にしようとしたが、これは失敗に終わる。除名処分の審査を担当した SPD のベルリン＝シュパンダウ支部は、2010年1月にモーゼス・メンデルスゾーン・センター(ポツダム)の政治学者ギデオン・ボツチュに鑑定書を依頼したが、ボツチュはザラツィンの発言を「明らかに人種主義的」と評価した。これに対しザラツィンはボツチュを3月1日『ズユートドイチェ・ツァイトウング』で非難し、更に連邦外務大臣ギド・ヴェスターヴェレ(当時 FDP 党首:1961年-)の社会国家批判に相槌を打って、生活保護受給者は冷水でシャワーを浴びればいいと発言した。SPD ベルリン州仲裁委員会は、結局3月15日にザラツィンの除名を否決した¹⁸⁾。

2010年5月6日、ドイチェ・フェルラークスアンシュタルトはザラツィンの著書『ドイツは自滅する』の刊行を予告し、8月23日に『シュピーゲル』と『ビルト』が移民問題部分の文面を事前公表した¹⁹⁾。この新著でザラツィンが披露しているのは、「六八年世代」の社会進出に伴って政策に反映されるようになった「ポリティカル・コレクトネス」、つまり弱者保護を当然とする風潮が²⁰⁾、人口政策、社会政策、教育政策、移民政策など広範な政策領域において、ドイツ連邦共和国を破滅に導いているという現状認識である。

自由主義が外国人排斥と結合するという政治的現象に関して、ティロ・ザラツィンの言動は、近代ドイツの政治評論家マックス・ヴェーバー(1864年-1920年)のそれを想起させるものがあり、両者を対比すると整理しやすい。ヴェーバーは1890年代、プロイセン・ユンカーのポーランド人労働者雇用を

批判するドイツ・ナショナリストとして擡頭したが、流入するポーランド人の「文化」水準を問題視したヴェーバーは、流入するイスラム系移民の知的度を問題視するザラツィンと論法が同じである。ヴェーバーはドイツ東部で「文化」(Cultur)が低く多産なポーランド人がドイツ人を圧倒する恐怖を訴えたが、ザラツィンもより「愚昧」(dumm)で多産なイスラム系移民が、少子高齢化のドイツ人を凌駕し、自分が自分の祖国で将来外国人のようになることを慨嘆している。自由主義者ヴェーバーは、キリスト教社会派の「憐憫感情」に政治的不健全さを感じていたが、これも新自由主義者ザラツィンの社会国家批判と重なる。ヴェーバーは女性解放運動を支持するようで、実は冷笑する面も有していたが、ザラツィンは知的女性の低い出産率を問題視している。ヴェーバーは慎重な言い方ながら、人種など遺伝的要因が人間の「文化」水準に果たす役割について学問的興味を懐いていたが、ザラツィンの人種論はこれをより大胆に展開したものだと言える。ただザラツィンには「ユダヤ人の遺伝子」のように、肯定的な意味で人種を論じている部分もある。ヴェーバーは自分にも他人にも厳しい自己規律を求め、一旦は鬱病に陥ったものの、基本姿勢は晩年まで変わらなかったが、ザラツィンも自己規律を人間の当然の義務と考えている。ヴェーバーは英米に憧憬を懐き自国ドイツを厳しく批判しつつも、それが西欧諸国と対等の「名士民族」の一つであることを切望したが、ザラツィンもアメリカ合衆国に憧憬しつつ、ドイツ国民としての健全な自己主張を要求している。ヴェーバーは愛国的政治評論家として常に挑発的な議論を展開したが、ザラツィンも「不都合な真実」の暴露を信条にしている。古典的自由主義の流れを継承していたヴェーバーの死後、総力戦体制から福祉国家体制へと移行するなか、世界を平等主義の大きな潮流が覆ったが、アメリカ合衆国を中心にそれが退潮し始めた1970年代に出現した新自由主義の子ザラツィンは、政治思想史的に位置付けるなら「帰ってきたマックス・ヴェーバー」(Max Weber revidius)と呼ばれることになるだろう²¹⁾。

3. 政界・言論界のザラツィン批判

ティロ・ザラツィンの新著を巡る議論は彼の移民論に対する糾弾の大合唱で

幕を開けた。これらの批判はいずれも、ザラツィンが著書で展開した新自由主義的秩序観を総体として見るのではなく、彼の挑発的移民論を集中的に批判するもので、ときにはザラツィンの人格にも非難が及んだ。2010年9月5日、イスタンブールのトルコ語日刊新聞『ヒュリエット』（自由）で、ミュンヘン特派員のジェラル・エズジャン（1954年ー）は状況をこう概観している。「ザラツィンは馬鹿げたテーゼで広い社会の同意を取り付けているが、ドイツはそのトルコ人を庇護の下に置いているように思われる。政党は右派から左派まで団結してザラツィンと対決している。知識人、学者、ジャーナリストはテレビのトークショウや新聞記事で鋭い批判を述べている。ただいつも読者の歓心を買っているある大手の大衆新聞だけが、言論の自由を主張している。興味深いことにザラツィンが最も知的だと見ている教育を受けた上層では、ネジュラ・ケレクを除けば殆ど誰一人、健全な人間の悟性を有したままザラツィン側に立つようなことはしなかったのである。」²² 実際ドイツの政界、言論界は、まずは左右を問わず一斉にザラツィン批判の声を上げた。8月24日、ドイツ文化間評議会はザラツィンが「右派過激政党・運動の支持者」になったとし、SPD党首ジグマール・ガブリエルも、どうしてザラツィンがSPD党員で居続けようとするのか分からないと述べた。同日連邦政府移民担当官マリア・ベーマー（CDU：1950年ー）は、ザラツィンの「総花的論争」を「侮蔑的で人を傷つけるもの」と非難し、緑の党院内幹事長フォルカー・ベック（1960年ー）も、ザラツィンの発言を「憎しみに満ちた無駄話」と断じた。8月25日、連邦宰相アンゲラ・メルケル（1954年ー）は、ザラツィンが「余りに、余りに論争的に」極論を述べているとし、連邦政府報道官シュテッフエン・ザイベルト（CDU：1960年ー）は連邦政府、連邦宰相がザラツィンに距離を置いていることを言明した。メルケルは8月30日には、『ヴェルト・アム・ゾントーク』でザラツィンの発言を「全く受け入れられない」と論評し、5日前より批判的姿勢を強めている。8月25日ユダヤ人中央評議会は、ザラツィンに「ネオナチ」国民民主党（NPD）への党籍移転を助言した。8月26日には、SPDベルリン支部が改めてザラツィンの除名を検討し始め、SPD党幹事長アンドレア・ナーレス（1970年ー）は日刊紙『ハンブルガー・アーベントブラット』でザラ

ツィンの銀行家としての能力を疑問視した。同日、連邦司法大臣ザビーネ・ロイトホイサー＝シュナレンベルガー（FDP：1951年－）は、ザラツィンの「社会生物学的仮定」は「我慢ならない」とし、ドイツを「移民国」と看做した上で、「我々の社会の自由度と開放性に我々は誇りをもちうる」と述べた。同日、緑の党連邦議会議員団長レナーテ・キューナスト（1955年－）は、ザラツィンが連邦銀行の行動規範を逸脱したと述べ、左派党共同党首ゲジネ・レツチュ（1961年－）は、連邦銀行にザラツィンの更迭を要求した。8月29日には退任直後のヘッセン州首相ローラント・コッホ（1958年－）が、『ビルト・アム・ゾンターク』でザラツィンの議論を「我慢ならない」と述べた。ちなみにコッホは1999年、シュレーダー連邦政府の国籍法緩和を批判して州首相となったのである。8月30日、緑の党共同党首クラウディア・ロート（1955年－）はザラツィンが「基本法の領域」を離れたと非難し、CSUの期待の星だった連邦国防大臣カール＝テオドール・フォン・ウント・ツー・グッテンベルク男爵（1971年－）も同日、どんな挑発にも限度があるとザラツィンに苦言を呈した²³。

ドイツのジャーナリストも続々とザラツィン批判を表明した。日刊紙『ターゲスタイトゥング』は、政治雑誌『シュピーゲル』が「過激な人種主義的ポピュリズム」を煽動するザラツィンの文面を掲載したこと自体が問題だとし、議論のための材料提供は必要だとする『シュピーゲル』編集部と対立した²⁴。また同紙のウルリケ・ヘルマン、アルケ・ヴィールトは、ザラツィンの統計の解釈には問題があると主張した²⁵。他にもフリージャーナリストのシュテファニー・パウルは、クロイツベルクの若手トルコ人の声を『ベルリナー・ツァイトゥング』で紹介している——「ザラツィン氏は全くの馬鹿だと思う。」「ドイツ人は我々外国人がデネル〔・ケバプ〕や野菜を売ることしか出来ないと思っている。」「子供が多いというのは全くの一般化だと思う。例えば私は娘が一人いるだけだ。」その際パウルは、知的職業に就く中流以上のトルコ人を選んで紹介していた²⁶。

「六八年世代」の著名な移民史研究者で、オスナブリュック大学名誉教授のクラウス・バーデ（1944年－）も、打倒ザラツィンに本腰を入れた。バーデは、

住民移動は人類史上ごく普通の現象であったと説き、ヨーロッパが閉鎖的な「欧州要塞」ではなく開放的な「移民大陸」たるべきことを力説する「多文化主義」の論客で²⁷⁾、政策提言も熱心に行ってきた。バーデは8月末からテレビなどマスメディアに登場し、イスラム系の名前を持つザラツィンがイスラム系移民の批判をすることに皮肉を述べていたが、9月7日の『シュピーゲル』には彼のインタビュー「ドイツには統合の窮状は存在しない」が掲載された。ここでバーデは、学者の矜持を込めてザラツィンを移民問題の「素人」(Laie)と呼び、ザラツィンの議論が「超保守的」ではなく「国民至上主義的 = エリート主義的」で、ドイツ史ではすでに一度恐ろしい帰結に繋がったものであること、ザラツィンの挙げた論拠が一般化できないこと、移民の教育が大きな成果を上げていることなどを強調した²⁸⁾。

この他にもザラツィン批判は枚挙に暇がない。2010年8月27日、就任後半年で飲酒運転のためドイツ福音協会評議会議長を辞任したマルゴット・ケースマン(1958年-)が、特定の間人集団の排除が人間の抹殺に繋がった(「ナチズム」の)経験を示唆して、ザラツィンに警告を発した²⁹⁾。またベルリン「民主主義と人権の家」の弁護士エーベルハルト・シュルツは、2010年9月4日の東独系日刊紙『ノイエス・ドイチュラント』に掲載されたインタビューで、ティロ・ザラツィンを刑事告発すると表明した³⁰⁾。

2011年に入ると、イスラム系知識人(一部にドイツ人イスラム学者も含む)による『多数者のマニフェスト』が刊行された。編者ヒラル・セズギン(1970年-)はフランクフルト・アム・マイン生まれのトルコ系女流文筆家で、フランクフルト大学で哲学を専攻し、日刊紙『フランクフルター・レントシャウ』紙で文芸欄を担当し、フェミニズムを公言する知識人である。セズギンはドイツ在住のイスラム系住民の体験談、信条告白、自己主張を集め、ザラツィンに対抗するマニフェストとした。そこではザラツィン本人は勿論、イスラム系住民に少しでも不信感があると思われたドイツ人政治家、言論人が、次々と批判されている。セズギンはこのマニフェストの編集に当たり、恐らく戦略的意図をもって、ザラツィンら移民批判者が問題視する下層民を表に出さず、多文化主義的、啓蒙的、フェミニズム的信条を懐くドイツ語達者の知識人や実務家を

執筆者に選び、イスラム系住民の多数派がすでにそうした知性主義的価値観の持ち主であり、寧ろドイツ人側が保守的信条に囚われているという印象を生みだそうとしているように思われる³¹⁾。

4. 政界・言論界のザラツィン擁護

しかし反ザラツィンで結論が出たかに見えた政界・言論界からも、数日遅れで擁護論が出始めた。ザラツィン擁護者は、現下のザラツィン批判が言論封殺に繋がる虞を強調しつつ、イスラム社会を批判的議論の対象にしにくい風潮に強い憤懣を表明したのだった。

口火を切ったのは、前年にもザラツィンを擁護した連邦ドイツ工業同盟元議長のハンス＝オラフ・ヘンケル（1940年－）である。ヘンケルは8月27日政治雑誌『ユング・フライハイム』で、ザラツィンの「二、三の発言」は批判されうるとしつつも、「幾つかのテーマ」についてはザラツィンの指摘に感謝すべきだと述べた。ヘンケルは後者の具体例として、ドイツ内外のイスラム女性の人権侵害を挙げ、緑の党政治家ロートが日頃女性の権利を主張しながら、イスラム世界に対してはそれを避けていると、その「二重の道徳」を批判した。同日、ジャーナリストのウド・ウルフコッテが『ライプツィガー・フォルクスツァイトゥング』で、ドイツは「世界福祉省」ではない、我々はいい加減にイスラム系移民の問題を率直に論じなければならないとし、移民がドイツの社会保障制度に大きな負担になっていることを強調した³²⁾。

2010年8月30日には『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング』で、社会学者ネジュラ・ケレク（1957年－）はザラツィンの議論を「解放の一撃」として歓迎した。イスタンブール出身でドイツ社会に同化したケレクは、フェミニストの社会学者として知られ、ドイツ社会に同化せず女性の劣位を固定化する政治・文化体系としてのイスラムを批判してきたが³³⁾、今回の「責任感のある市民」ザラツィンの指摘はまさしく「峻厳な真実」について語るものだと言明し、ザラツィンの口を封じようとするドイツ「政治階級」こそ議論を避けているのではないかと、道徳ではなくザラツィンの具体的提案内容を議論すべきだと、メルケル、ガブリエル、ナーレスを批判したのだった。同

時にケレクは、イスラム系移民側にもこれまでの歴史への猛省を促し、統合への努力を訴えた³⁴⁾。更にケレクの批判は移民史研究の権威バーデに及び、2011年5月9日『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング』掲載の記事「バーデ教授が抗ザラツイン剤を処方する」に結実した。ケレクはバーデ主宰の「ドイツ統合移動財団専門家評議会」が、イデオロギー的基準で政治を行い、「ポリティカル・コレクトネス」への異論を許さず、学問の自由を阻害する「ドイツ移動政策の政治局」になっていると告発したのだった³⁵⁾。

2010年9月4日には『ヴェルト』で、ユダヤ系言論人ラルフ・ジョルダーノ（1923年ー）がザラツイン擁護の声を上げた。「ティロ・ザラツインの本はドイツ連邦共和国のポリティカル・コレクトネスの中枢への一撃となった。これはドイツの多文化主義者、一面的な外国人臍員、博愛主義者への正面からの攻撃である。職業的憤慨者 [Berufsempörer]、社会的ロマン主義者、宥和の使徒の集まった大群が、まだ読んでもない本を引き裂いて放り投げている。」³⁶⁾

2010年9月6日に日刊紙『ズエートドイチェ・ツァイトゥング』（南ドイツ新聞）で、元連邦教育研究大臣（シュミット政権）・元ハンブルク市長のクラウス・フォン・ドホナーニ（SPD・1928年ー）が、ザラツイン擁護の筆を執った。ドホナーニは、ザラツインの要求していることは他国では長らく実践されていることであり、（ナチズムの）歴史の陰のもとでドイツ人の自己認識が余りに一面的になり、現実の問題を直視できなくなっていると、自虐趣味批判を展開したのである³⁷⁾。

同じく2010年9月6日、元ノルトライン＝ヴェストファーレン州首相・元連邦経済労働大臣（シュレーダー政権）ヴォルフガング・クレメント（1940年ー）が、SPDのザラツイン除名審査を批判する発言を行った。シュレーダー政権で社会政策の整理と財政再建とを進めた「アジェンダ2010」を支持していたクレメントは、SPD内でもシュレーダーと並んで新自由主義に近接した政治家であったが、のちSPDから除名され、現在はFDPに接近している。クレメントはザラツインの議論を「大変具体的」、「非常にためになる」とし、SPDはザラツインを排除する以前にその提案を実現するよう検討せよと述べたのである³⁸⁾。

2010年9月11日にジョヴァンニ・ディ・ロレンツォとの対談で登場したのが、92歳の誕生日を前にした元連邦宰相ヘルムート・シュミット（1918年ー）である。ザラツィンが任官した当時の連邦宰相であったシュミットは、2009年段階でもザラツィンを30年来の知人として敬意を隠さなかった。シュミットは行き過ぎた表現の多いザラツィンに自重、再考を促したものの、移民の統合が不十分であること、メディアや「政治階級」がザラツィンを挑発したこと、SPDが古参党员ザラツィンを排除しようとしていることに、多くの人々と同様、自分も憂慮していると述べ、特に言論の自由の確保が必須であると説いた。またシュミットは、自分はすでに1970年代初頭から余りに異なる文化を持つ移民の流入の制限を必要とし、のちにその実行を促したと述べた³⁹⁾。

2010年9月30日、文筆家、テレビ司会者のテア・ドルン（1970年ー）が『ツァイト』に「善良なる思索者たちの法廷」を發表し、ザラツィンを吊し上げるマスメディアを揶揄した。ドルンは論争を大衆煽動と同視して否定する社会が言論の自由を損なっていると批判し、今後の移民問題を「文化的に敏感な言葉」で報道するようマスメディアに圧力をかけて失敗したアイギュル・エズカン（ニーダーザクセン州社会女性家庭保険大臣・CDU・1971年ー）を、「図々しい」と名指しで批判した⁴⁰⁾。

2010年10月7日には『ツァイト』で、ビーレフェルト大学名誉教授ハンス＝ウルリヒ・ヴェーラー（1931年ー）が、ザラツィンは「正鵠を得ている」と訴えた。半世紀に亘りドイツ「過去の克服」の牽引者であった歴史家ヴェーラーは、「六八年世代」の道德主義的「政治文化」を体現する言論人であったが、近年はトルコ系移民の振舞いに苛立ちを強めていた。ヴェーラーのトルコ批判は、かつて近代ドイツを裁断したときの西欧主義的論法を、トルコに容赦なく適用したものである⁴¹⁾。ヴェーラーはザラツィン批判の嵐を「古典的な議論の拒否」であるとし、ドイツ連銀理事更迭の要求を「政治的な職業禁止」と慨嘆する。ヴェーラーは、ドイツ「政治階級」が販売前からザラツィンの片言隻語を批判してその主張を正視しなかった異常さを批判し、野放図な移民受入の問題性を隠蔽してきたとして、従来 of ドイツの移民政策論のあり方に疑問を投げかけたのだった⁴²⁾。

こうしたなか2010年10月3日、「ドイツ統一の日」記念式典での連邦大統領クリスティアン・ヴルフ（CDU・カトリック）の演説には注目が集まった。ヴルフの演説はザラツィンへの皮肉を散りばめつつも、結論は八方美人的なものになった。一方でヴルフは、統一後にドイツがより世界に開かれ多様になったとし、ゲーテ『東西詩集』を引きつつ、イスラムをドイツの構成要素の一つと呼んだ。他方でヴルフは、「我々のキリスト教的＝ユダヤ教的歴史」という表現をし、「多文化主義的幻想」(multikulturelle Illusion) が問題を過小評価してきたのが分かったと述べた。要するに大統領は移民の流入という現実を受け止めつつ、彼らに統合への努力を求めたのである。ちなみにこの大統領演説の締めの一語は、「神よドイツを守りたまえ」であった（「神」は単数形であり、ユダヤ教、キリスト教とイスラム教とを包含できる表現になっているが、多神教や無神論とは距離を置くということなのかもしれない⁴³⁾。

5. 大衆の独り歩き

『フランクフルター・アルゲマイネ・ツァイトゥング』編集人フランク・シルマッハー（1959年－）は、ザラツィンは不安に怯える多くの人々の代弁者だと述べているが⁴⁴⁾、実際この論争で大きな存在感を示したのは大衆であった。それもゴールドハーゲン論争のときのように自ら公開討論会に出向き、客席から挙手して周囲を意識しつつ発言をする「市民」ではなく、自宅のパソコンから人目を気にせずに気軽に本音を投稿するため、その動向が予測不可能な、匿名の非エリート社会構成員である。

2011年8月9日までにネット書店大手のドイツ・アマゾンに掲載された書評⁴⁵⁾（全て匿名読者によるもの）を見ると、ザラツィンは読者に圧倒的に支持された結果になっている。同書掲載の書評496のうち、5つ星は349、4つ星は66、3つ星は32、2つ星は20、1つ星は29となっている。更に、5つ星など高評価のものは千人単位の評価参加者がおり、賛同者も千人単位でいるが、1つ星など低評価のものは評価参加者が百人単位かそれ以下で、賛同者は更に少ない。以下は高評価のものを3つ抜粋してみよう⁴⁶⁾。

「読んでから文句言え」（4132人中3747人賛同）「この本は私が長年来読んだ

なかで最も野心的で、最も憂慮を呼び起こし、同時に最も心を揺り動かすものの一つである。『自分の信念に疑問を提起する』気がある者なら誰しも、読んで得るものがあるだろう。それも著者の評価や結論全てを共有するのではない場合にまさしくそうである。更にこの本は稀にしか成功しないことに成功している。つまり一冊の本をもって、政治が許し難いことに等閑にしてきた一つの重要テーマについての議論を喚起するということである。／これに伴いザラツィンは彼の本でドイツにだけでなく、書籍そのものへも貢献した。それは闘争の書だが、書籍をもって闘う者は平和的に闘っている。事実と論拠をもって闘うのであって、猿轡、職業禁止、党籍剥奪審査をもってではないのである。拳骨、刃物、舗石をもってでも、カラシニコフや自爆テロをもってでもないのである。もし次回のドイツ出版業界平和賞の候補を挙げるなら、それはティロ・ザラツィンであろう。」(結論部のみ)

「将来の世代はこの本に感謝するだろう」(2643人中2267人賛同)「要するに、ティロ・ザラツィンは不都合な真実を語り、それゆえ感謝に値するのである。この男は遂に65歳となり、隠居生活を楽しむことができる——イデオロギー的放火を非難されることなしに。どうして彼はこうした行動に出たのだろうか？挑発が好きなのか？いや、我が国と彼の将来を案じたからである！我々の曾孫は、この本に関して彼に感謝するだろう——もっとも彼らが生れていればの話だが！」(結論部のみ)

「一人の外国人から見たザラツィンの本」(37人中29人賛同)「ドイツの将来についてどうでもいいとは思わない者は、この本を読むべきである。特に移民はそうするべきである。ザラツィンは不都合な真実を語り、ドイツに新しい故郷を見る我々は、彼のテーゼを内面化するべきなのである。そうでなければ、我々はいつか貧困、不幸、不法状態に陥るだろう。残念ながら世界の大半の国々はそうした状態にあり、そうした国々から大抵の社会的に弱い移民が来ているのである。つまりこういうことである。仕事に行け、子供をギムナジウムに送れ、自力でドイツ語を学べ、教育を受けろ、博物館 [Museen] を訪れろ (モスク [Moscheen] と混同するな)。美術館を訪れろ、ドイツ人女と結婚しろ、そして一番大事なことだが、選挙に行って、社会国家が底なしの樽だなどと思

っている奴に投票するな、そいつは全くのポピュリストだから。」（結論部のみ）

ザラツィンへの素朴な共感が並ぶこうしたドイツのインターネット談議は、中華人民共和国の言論統制下でのそれに似たものがあるのかもしれない。つまりエリートの思惑とは裏腹に大衆の議論が独り歩きし、そのことがネットを通じて内外の人々に知られてしまうのである。エリートとは違う意見の人も少なからず居るという事実に、内外の人々が気付くと、また新しい政治状況が生み出されていくことになる。

6. 「知的戒厳令体制」の動揺：ドイツ「政治文化」の変容

ドイツ連邦共和国は、殊に70年代以来「知的戒厳令体制」の国であった。筆者が「知的戒厳令体制」と呼ぶのは、公式には言論の自由を標榜しながら、実際には道徳主義への義務感で極度に緊張し、知的活動に相当の制約がある体制のことである。固より人間は多くの場合、人生の過程で自ら道徳感情を育んでいくものだが、「六八年世代」擡頭後のドイツでは、個人の自発的な道徳感情が発露する前に、知的エリートにより「上から」特定の思考枠組が設定されるという点に特徴がある。西欧には、「私はあなたの意見には反対だが、あなたがそれを主張する自由は命がけで守る」という言葉があるが、ドイツ連邦共和国では寧ろ「正しい」意見以外は語らせないという風潮が強い。一旦「正しい」意見から外れたと看做された勢力や人物——例えば「右翼」、「ネオナチ」、「歴史修正主義者」、「共産主義者」——は、通常の批判の範囲を越えて、社会的に村八分の扱いとなり、その人物に一定の理解を示すものも、自らが同じ扱いとなる恐怖から口を噤むのである。とはいえ勿論、ドイツ国民が過去半世紀で自己愛を止揚し、こういった「道徳絶対主義」（トーマス・ニッパダイ）⁴⁷⁾を真に内面化したというわけではない。ドイツ史が一方的に批判され、ハリウッド映画でドイツ人が繰り返し戯画化されても抗議できない憤懣、フランス革命記念日のように無邪気に愛国心を謳歌する機会が（サッカー・ワールドカップ以外には）ない物足りなさ、あらゆる対象を腹藏なく批判できないもどかしさ——ドイツ人と交流した者なら、そういった鬱屈した思いを聞かされることは少なくないだろう。ただこれまでは、それは所詮気の置けない仲間内での戯

言に過ぎなかった。「闘う民主制」、「実質的法治国家」を標榜する国では、社会的地位のある者が迂闊な発言をすると、社会生活上容易ならざる事態に陥るからである。ドイツの国家理性は、「ヨーロッパ的国民国家」論（ハインリヒ・アウグスト・ヴィンクラー）のように慎重に偽装された形でのみ論じられる。大学の歴史学者たちは、「自分たちは官吏だから国家に拘束されるのは当然」⁴⁸⁾と割り切って、政治情勢に対応した歴史観を教授していく。歴史学者にも、史料への情熱以前に「公共」への貢献度が問われるのである。「ナチズム」が害悪だったという結論は徹底して教育されるが、『我が闘争』の現物を手に取るのは難しく、一般人にはヒトラーの言葉に直接接触して、何がどう「悪い」のかを自分で考える機会が限定されている。こうした状況では、次のような不思議な光景が看取されることになる——歴代のユダヤ人中央評議会議長は道德の審判者として高い社会的威信を享受しているのに、私的サークルではユダヤ人への悪口が絶えず、ユダヤ人墓地が破壊される、政治家やマスメディアは外国人への寛容を高唱するが、日常生活では外国人（特に非EU市民）への当惑や嫌悪が止まない、「ネオナチ」はマスメディアでは「不可触賤民」扱いなのに、州やゲマインデの選挙では健闘し、政党助成金も受領している——。従ってこうした国の政治を観察する者は、本音と建前の交錯を鋭利な視線で解析しなければ、一部の言論を誇大評価した皮相的な観察に終わってしまうだろう。

ザラツィン論争は、このドイツ「知的戒厳令体制」の内情が容赦なく晒された点で特筆に値する。かつて1980年代、「公共圏」の体现者を自負する言論人たちは、西ドイツ社会における「ポストナショナル」な秩序意識の定着を既成事実のように語ったが、「ベルリンの壁」崩壊後の大衆ナショナリズムの擡頭は、そうした事実認識が希望的観測に過ぎなかった可能性を浮上させた。今回のザラツィン論争は、以下のような点で注目される。第一にこの論争は、官界など選挙やマスメディアに晒されにくい領域では、ドイツのエリートにも多様な意見の者がいることが明らかになった。ザラツィンがSPD 党員の成功した官僚政治家であったために、通常の出版社からの単行本刊行が可能となり、エリート世界の一部からも賛同を得ることになったのである。第二に、インターネットの発達で匿名のまま誰でも議論に参加できるようになると、人脈によりマス

メディアや教壇での発言権を握る言論人たちが輿論を代表することが困難になり、論争の行方が不透明化することになった。現代政治におけるインターネットの大きな作用は、最近我々がアラビア諸国やイギリスの暴動に関してフェイスブックの威力を実感した通りである。歴史認識問題と違って、移民問題は大衆が日常で体験する領域であり、専門家の「学問的」権威が相対化されやすいという面もあるだろう。第三にザラツィン論争は、フィッシャー論争や歴史家論争などがそう説明されてきたような、啓蒙対保守という二元論⁴⁹⁾では整理できないことが明白になっている。この論争の場合、ドイツの「過去の克服」の論客として日本でも評価されてきたシュミット、ジョルダノー、ヴェーラーが、更にイスラム女性を移民社会の「奴隷」状態から解放せよと訴えるケレクが、ザラツィン擁護者に名を連ねているのである。

ザラツィン論争がドイツ政治にどのような影響を与えるかは、未だ判然としない。すでに連邦宰相・CDU党首メルケルはザラツィン批判の傍らで、2010年10月には「多文化主義への取り掛かりは完全に失敗した」と発言し、同時にCSU党首ゼーホーファーも「移民国」との認識を否定し「ドイツの指導的文化」への同化を要求するなど、事実上ザラツィンに呼応する意見表明として論議を呼んだ⁵⁰⁾。ザラツィンの議論、あるいはそれを擁護するネット上の議論から判断するに、「六八年世代」への憤懣の余り、それとは正反対の白黒図式、つまり移民がドイツ社会の害悪であることを当然視し、「六八年世代」の偽善を一笑に付すというような風潮が、今後拡大していく可能性も十分あるように思われる。ザラツィンの議論には、「六八年世代」の善悪二元論の問題性を際立たせる効果があったが、彼自身の議論もまた感情的で善悪二元論に陥っている面がある。

2011年7月22日のノルウェー大規模テロ事件でも顕在化したように、移民問題は現代ヨーロッパ共通のアポリアである。ザラツィン論争はそのドイツにおける一表現であって、「ドイツ特有の道」の産物ではない。道義的意味のみならず少子高齢化対策としても、移民の存在をヨーロッパ社会の不可欠な一要素と捉えるエリートの合意は、恐らく大枠では今後も維持されるだろうが、もしエリートがその思考に多面性を欠き、また権威主義的な態度を示すならば、

反動として「政治階級」は知的に不誠実だ、移民は不当に優遇されているという憤懣が顕在化し、輿論が両極分化する可能性がある。ドイツを含めたヨーロッパの「多文化共生」がこれからどうなっていくのかは、今後の重要な論点となるだろう。

後記：「知的戒厳令体制」を巡る激しい攻防——ミュンヘンからの観察

以上は2011年年末段階の文章で、一部に加除修正はあるが論旨はそのままである。その後2012年4月から2013年1月まで、筆者はミュンヘン現代史研究所に滞在し、ドイツ「知的戒厳令体制」を巡る攻防を間近で見る機会を得たので、そこでの観察を文末に付記しておきたい。

2012年のヨーロッパ政治は、欧州債務危機への対処に終始した。ギリシア、イタリア、アイルランド、スペイン、ポルトガル、キプロスと拡大するユーロ参加国の財政危機に対し、当初ドイツのアンゲラ・メルケル政権及びフランスのニコラ・サルコジ政権は厳格な財政健全化路線で協力していた。だがサルコジがドイツの主張する財政政策を模範視したこと、メルケルが露骨にサルコジ続投を望んだことなどが、ナショナリズムへの自己批判が乏しいフランス国民の自尊心を傷付けたこともあって、サルコジは2012年4月22日・5月6日の仏大統領選挙で社会党のフランソワ・オランドに敗れた。社会主義者オランドは自由主義者サルコジとは逆に危機諸国の救済に重点を置き、またドイツの負担が大きく危機諸国に寛容なユーロ共同債の導入を主張した。結局ヨーロッパ連合は、一時噂された危機諸国のユーロ離脱ではなく、危機諸国への財政支援と欧州安定メカニズムの創設によって、危機に対処することにした。

ヨーロッパ連合随一の経済大国ドイツは、ユーロ安でドイツ経済が好調なこともあり、欧州債務危機で重荷を負わされることになった。度重なる財政支援にも拘らず収束しない危機諸国の状況、ドイツに重い負担をかけ危機諸国の自己改善意欲を減退させるユーロ共同債への反撥は、ドイツ国民のなかで大きな潮流となり、欧州安定メカニズムに対しては、ドイツの税金にドイツ国民の民主的統制が及ばなくなるとして、一部与野党議員らにより連邦憲法裁判所への

違憲訴訟まで提起された（但し9月12日にドイツの負担額限定、追加負担は連邦議会の承認必要という条件で合憲判決）。ドイツなどの再三の支援にも拘らず、ギリシア国民の一部が国民社会主義党の制服を着たメルケルの戯画を掲げ、支援の見返りに課される財政削減策に反撥し、自国の財政危機も本来「ナチス・ドイツ」の侵攻が原因であり、今でもドイツ人はギリシア人を人種差別している、債務など返済の必要がないなどと主張するに到って、ドイツ国内に憤激が広まっている。

ドイツ連邦共和国の指導者たちは、国内の不満を鎮静化させるのに躍起である。危機諸国に放漫財政改善の成果を要求する与党キリスト教民主・社会同盟、自由民主党と、強者（ドイツ、富裕層、銀行）攻撃、弱者（危機諸国、貧困層）保護を党是とする社会民主党、緑の党、左派党との相違はあるが、主要政党間が一致しているのは、ヨーロッパ統合を前方への逃避で乗り切るという方針である。つまり危機は好機であるとして、ヨーロッパ諸国の政治統合を一気に進めるといっているのである。ただこうした政治統合の深化は、ドイツのヨーロッパ連合における指導性を必然的に高め、ドイツ封じ込め、自国中心主義の発想を捨て切れない英仏を刺戟するものであり、新たな緊張の火種となるだろう。

欧州債務危機下のドイツ連邦共和国では、ヨーロッパ統合の理念はもはや唯一神の崇拜のように、異論を許さない雰囲気醸成している⁵¹⁾。ヨーロッパ統合推進の説明において、もはや経済的利点は重要ではない。統合論者の力説するのは、世界戦争の惨禍と戦後平和の恩恵であり、強引なヨーロッパ統合推進への疑問、経済的合理性の考慮、ドイツの負担への不満は、平和への叛逆、歴史の忘却、「右翼ポピュリズム」(Rechtspopulismus) だとして、忽ち道德主義的批判の対象となる。内部の団結強化のために神聖視されたヨーロッパは、その世界史的使命が高唱され、非西洋地域に対し模範を示すという自負心は、公然と西洋中心主義の色彩を帯びている。ドイツ輿論の西洋中心主義は、シリア、イラン、ロシア、中華人民共和国などに対する、「西歐的にして普遍的な」価値観に基づく批判という形でも顕在化している。ヨーロッパ連合への2012年ノーベル平和賞の授与は、ヨーロッパ統合礼讃の風潮を後押しし、負担に反撥するドイツ輿論を封じるための戦略という側面があるだろう。

こうした緊張状態のなか、ドイツ連邦共和国の政治論争も白熱した展開を見せた。この過程は、筆者には昨年指摘した「知的戒厳令体制」を巡る攻防であるように思われた。

2012年4月初旬、ノーベル文学賞作家ギュンター・グラスが、「言われなければならないこと」と題する詩を発表し、イスラエルの反アラブ政策を批判した。グラスはイスラエルの核兵器が世界戦争を惹起しかねないとし、イスラエルに武器を売却しているドイツをも批判したのである。グラスはこの詩をもって、いまだにイスラエルを批判的に論じられないドイツ言論界の状況に疑問を投げかけたのだった。ドイツ・ナショナリズム、教養市民文化の批判者として勇名を馳せてきたグラスは、すでに2006年に親衛隊員としての経歴が発覚した時点で非難されていたが、いまではイスラエル政府から入国禁止を通告されるまでになり、すっかり輿論におけるその立場を変えた。ドイツ国内では、「吐き気がする」(ekelhaft)と述べたユダヤ人文芸評論家マルセル・ライヒ＝ラニツキのように、グラスのイスラエル批判を反ユダヤ主義と同視し攻撃する声があるなか、東西ドイツ統一を巡り1990年にグラスと論争したルドルフ・アウクシュタインの子供ヤーコプが、ジャーナリストとしてグラス擁護の論陣を張ったのは興味深い現象であった(ARD討論番組「ギュンター・ヤオホ」(2012年4月15日))⁵²⁾。また多くの政治家は、ザラツイン論争時と同じくグラスに距離を置いたが、イスラエル政府からの入国禁止には過剰反応ではないかという疑問も上がった。

2012年5月2日、2015年までヒトラー『我が闘争』の著作権を有するバイエルン自由国政府が、これを評釈付で学校教材にするという計画を立てたことを巡り、ARD討論番組「アンネ・ヴィル」で討論が行われた。『我が闘争』は、ドイツ国外では各国語版が頒布されているが、ドイツ国内では頒布が禁止されており、研究者の閲覧すら通常の図書館では容易でない場合があり、「知的戒厳令体制」の象徴となっていた⁵³⁾。「アンネ・ヴィル」では、推進側のノルベルト・ガイス(CSU連邦議会議員)に対し、危険性に配慮して「評釈付」とはしながらも、『我が闘争』の公開に賛同する声が多かった。一方でフォルカー・ベック(緑の党連邦議会議員)や、国民社会主義関係文献の公開朗読で知られ

るトルコ系カバレティストのセルダル・ソムンジュらが、「若者を信頼する」立場から公開を支持したのに対し、他方でガブリエレ・パーリング（アルヌルフ・パーリング夫人）は、いい加減に「被害者としてのドイツ人」についても語るべきだとの立場を示した。これに対してヴィプケ・ブルーンス（ジャーナリスト）は、危険であり公開は不要とする立場を堅持した⁵⁴。

2012年5月中旬、ザラツィンが新著『ヨーロッパはユーロを必要としない』⁵⁵を刊行することが明らかになり、ARD 討論番組「ギュンター・ヤオホ」（2012年5月20日）は、各党政治家や街頭の抗議にも拘らずザラツィンを招待し、ユーロ支持者ペール・シュタインブルック前連邦財務大臣（SPD）と対談を設定した。口頭では文面ほど雄弁ではないザラツィンに対して、シュタインブルックは「過去の克服」やヨーロッパ統合の道義的意義、世界におけるヨーロッパ「文明」（Zivilisation）の価値を強調したが、泥沼のギリシア危機をどうするかというザラツィンの批判には明瞭な答えがなく、いわば精神論に終始した。当のザラツィンを前に態度を硬化させ、その議論を頭から論外と決めてかかるシュタインブルックの討論姿勢は、「知的戒厳令体制」を体現したものであった。とはいえザラツィンも、財務官僚として自らユーロ実現に加担した過去を問われ、ユーロを離脱してもその後の見通しが無いという批判には説得的な応答ができなかった。

2012年夏のロンドン・オリンピックに際しては、女子競艇選手ナディア・ドリュガラの問題が話題を呼んだ。元婦人警官のドリュガラは、その交際相手ミヒャエル・フィッシャーがNPD活動家であったことが発覚したために、ロンドンから事実上送還された。ドイツ五輪委員会のミヒャエル・ヴェスパー委員長（緑の党）は、ドリュガラは（ヴェスパーの事情聴取の後）自主的に選手団を去ったと主張し、同時にドイツ連邦内務省の事前指導に準拠しつつ、指導的スポーツ選手の「民主主義への信仰告白」（Demokratiebekenntnis）を前提視するという姿勢を示した⁵⁶。本人は当該団体と関係なく、交際相手もすでに脱退しているにも拘らず、一旦ロンドンに渡航した女子選手に出場を断念させるというのは、まさしく「知的戒厳令体制」の急進的発現形態である。だがこれに対して、パリ学生叛乱の闘士として有名なダニエル・コーン＝ベンディッ

ト（緑の党）が『ツァイト』のインタビューで批判を展開した。コーン＝ベンディットは、個々のスポーツ選手の「信条穿鑿」（Gesinnungsschnüffelei）をするのは不適當であるとし、また一女性が自分の望む男性と交際するのは、女性自身が右派的立場で登場するのでもなければ可能であるという立場を表明した。コーン＝ベンディットは、事情聴取で本人に何ら問題が発見できなかったにも拘らず事実上排除した党友ヴェスパーについて、「凝り固まっているだけでなく、スキャンダラスだ」と非難した⁵⁷⁾。コーン＝ベンディットは、選手の「民主主義への信仰告白」は要求しつつも、本人がそれに反する言動を公然としていない限りは、魔女狩り的な穿鑿、連帯責任による排除はするべきではないと考えたのである。ここでドイツ「多文化主義」の先駆者コーン＝ベンディットが、党友を非難するという構図になっていることには注目に値する。なおドリュガラは、2012年11月1日から連邦軍兵士に採用され、競艇を続けることとなった⁵⁸⁾。

2012年10月初旬、ティロ・ザラツィン夫人のウルズラ・ザラツィン（1951年－）が、著書『魔女狩り——ベルリンにおける私の学校勤務』⁵⁹⁾を刊行した。ザラツィン夫人は1973年以来学校教師（特に小学校）で、夫がボンで勤務中はライン地方の学校に勤務していたが、夫のベルリン転勤に同行しベルリンの学校に異動して、その荒廃ぶりに直面した。ザラツィン教諭は、多くの移民系児童を抱え、ドイツ語運用もままならないまま「学級崩壊」が進み、保護者が無理難題を持ち込む状況で、学校側は規律強化の措置を怠った、ザラツィン教諭の教育が児童に厳しく「教育的でない」（unpädagogisch）という苦情が保護者から相次ぎ、大衆新聞に中傷を寄せるものも現れ、学校側はこうした声に迎合し、遂には夫ティロの著書刊行で激化する「非難攻撃」（Mobbing）を前にザラツィン教諭の授業担当を外し、結局2011年に彼女は休職するに到ったと主張する。本書は、すでに大衆新聞などで展開されたザラツィン教諭批判への反撃という側面があり、一部実名で登場人物が批判されている。更にザラツィン教諭は、規律を欠いた教育が児童の能力を伸ばせず、著しく能力の低い児童を世に送り出しているとして、様々な論点から楽天的・弱者保護的な教育論への反論を試みている。ザラツィン教諭の人間観は自由主義的で、まさしく夫ザ

ラツインのものと同じしている。

以上見てきたように、ドイツでは「知的戒厳令体制」を巡る賛成派・反対派の綱引きが著しい白熱ぶりを見せている。その綻びはもはや覆うべくもないが、それを守ろうとする動きも依然根強く、今後の情勢は予断を許さない。ドイツ「知的戒厳令体制」は単なる国内的産物でなく、周辺諸国がそれをドイツに課している面もある。いずれにしても世代交代に従い、「政治文化」が変容することは不可避だろう。

注

- 1) Max Weber, *Der Nationalstaat und die Volkswirtschaftspolitik*. Akademische Antrittsrede, in: Max Weber-Gesamtausgabe I/4, Tübingen: Mohr, 1993, S. 554.
- 2) Giovanni di Lorenzo/Helmut Schmidt, *Verstehen Sie das, Herr Schmidt*, in: Die Sarrazin-Debatte, in: Patrik Schwarz (Hrsg.), *Die Sarrazin-Debatte. Eine Provokation – und die Antworten*, 1. Aufl., Hamburg: Edel, 2010, S. 226.
- 3) Thilo Sarrazin, *Deutschland schafft sich ab. Wie wir unser Land aufs Spiel setzen*, München: DVA, 2010. なお筆者が入手したのは同年刊の第8版である。
- 4) ドイツ「六八年世代」(Die 68er Generation)とは、1968年前後に青年期を迎え、この年を頂点とする学生叛乱やその周辺の左派的活動に参加した集団を指している。彼らは公民権運動やヴェトナム反戦運動など米「リベラル」思想に影響を受け、ドイツで「伝統的価値」への「異議申立」を進めた。彼らは当初しばしばテロリズムに訴えたが、やがて職業世界に進出し、とりわけ大学、言論界、新設の緑の党や社会民主党で活躍して、ドイツ社会の知的主導権を握っていった。平和主義の一環としての軍備(特に核兵器配備)反対、反資本主義の一環としての環境保護、個人の自由の一環としての徴兵拒否、男女同権化、同性愛同権化など、彼らの要求項目は多岐に亘るが、その出発点は親や教師など先行世代の「ナチズム」への加担の糾弾にあり、文化的・血統的同一性に根差したアイデンティティ(従来型のドイツ・ナショナリズム)の峻拒とその論理的帰結としてのヨーロッパ統合(国民国家の解体)、多文化主義(「ドイツ文化」に対する移民の「差異への権利」の要求)が彼らの大目標である。「憲法愛国主義」を唱えたハーバーマースや歴史学からのナショナリズム排除を進めた「ドイツ社会史派」は、1968年当時はすでに大学教官であり、叛乱学生と対峙したものの、その思想は既存の体制批判という点では彼らと共鳴していた。なお「六八年世代」を彼らの目線で紹介した邦語文献として、三島憲一『戦後ドイツ——その知的歴史』(岩波書店、平成3年)、井関正久『ドイツを変えた68年運動』(白水社、平成17年)な

- どがある。更に概説としては以下の文献がある。Ingrid Gilcher-Holtey, *Die 68er Bewegung. Deutschland – Westeuropa – USA*, 4. Aufl., München: C.H. Beck, 2008.
- 5) Sarrazin, *Deutschland schafft sich ab*, S. 391–392.
 - 6) <http://www.thilosarrazin.com> (2011年8月8日閲覧)。
 - 7) 今野元 「教皇ベネディクトゥス一六世の闘争——キリスト教的ヨーロッパのための「二正面作戦」」、『ドイツ研究』第45号 (平成23年)、177–192頁。
 - 8) Ahnenforschung: Thilo Sarrazin ist ein großer Integrationserfolg (<http://www.welt.de/politik/article4801004/Thilo-Sarrazin-ist-ein-grosser-Integrationserfolg.html> : 2011年6月27日閲覧); The Saracen and the Jews. A Bundesbank official stirs controversy again (<http://www.weeklystandard.com/blogs/saracen-and-jews?page=2> : 2011年6月27日閲覧) ; Hildburg Bruns, Wer ist der Mann, über den ganz Deutschland streitet?, in: *Deutschlandstiftung Integration* (Hrsg.), Sarrazin. Eine deutsche Debatte, München/Zürich: Piper, 2010, S. 66–68; Ahmet Külahçı, Sarrazin: Ich bin auch kein „reinrassiger Deutscher“, in: Sarrazin, S. 20.
 - 9) Institut für Staatspolitik (Hrsg.), *Der Fall Sarrazin. Eine Analyse*, 4., aktualisierte Aufl., Albersroda: Institut für Staatspolitik, 2010, S. 7.
 - 10) Hildburg Bruns, Wer ist der Mann, über den ganz Deutschland streitet?, in: Sarrazin, S. 66–68.
 - 11) Constanze von Bullion, Am warmen Ofen der Völkerfreundschaft, in: Sarrazin, S. 15–39.
 - 12) Ahmet Külahçı, Sarrazin: Ich bin auch kein „reinrassiger Deutscher“, in: Sarrazin, S. 20.
 - 13) Wolfgang Büscher, Der Seemann, in: *Die Sarrazin-Debatte*, S. 69.
 - 14) Klaus-Peter Schmid, „Nur ein Vorspiel“, in: *Die Sarrazin-Debatte*, S. 42–47; Wolfgang Büscher, Stadt der Spieler, in: *Ebenda*, S. 48–51; Marc Brost/Thomas E. Schmidt, „Genug Chaos für Berlin“, in: *Ebenda*, S. 52–57; Peter Dausend, Die rechten Wilden, in: *Ebenda*, S. 58–62; Wolfgang Büscher, Der Seemann, in: *Ebenda*, S. 63–71.
 - 15) Sarrazins Vorstoß – eine Chronik, in: Institut für Staatspolitik (Hrsg.), *Sarrazin lesen. Was steckt in Deutschland schafft sich ab*, Albersroda: Institut für Staatspolitik, 2010, S. 2.
 - 16) http://www.pi-news.net/wp/uploads/2009/10/sarrazin_interview1.pdf (2011年7月27日閲覧)。
 - 17) Sarrazins Vorstoß – eine Chronik, in: *Sarrazin lesen*, S. 2.
 - 18) *Ebenda*, S. 2–3.
 - 19) *Ebenda*, S. 3.
 - 20) アメリカ合衆国に起源を有する「ポリティカル・コレクトネス」は、言語表現から「差別」的と目される部分を除去した状態を示す概念だが、ザラツィンやその支持者はその概念の背景にある急進的平等主義を指す言葉として用いている。

- 21) 今野元『マックス・ヴェーバー——ある西欧派ドイツ・ナショナリストの生涯』(東京大学出版会, 2007年)。
- 22) Celal Özcan, Deutschland nimmt seine Türken in Schutz, in: Sarrazin, S. 105.
- 23) Sarrazins Vorstoß – eine Chronik, in: Sarrazin lesen, S. 2–5.
- 24) Mathias Müller von Blumencron im Gespräch mit Steffen Grimberg, Ich habe lange mit mir gerungen, in: Sarrazin, S. 16–18.
- 25) Ebenda.
- 26) Ulrike Herrmann/Alke Wierth, Die Gene sind Schuld, in: Sarrazin, S. 41–45.
- 27) Klaus J. Bade, Europa in Bewegung. Migration vom späten 18. Jahrhundert bis zur Gegenwart, broschierte, durchgesehene Sonderausgabe, München: Beck, 2002.
- 28) Klaus Bade, Es gibt keine Integrationsmisere in Deutschland (<http://www.spiegel.de/politik/deutschland/0,1518,716081,00.html> : 2011年7月26日閲覧). 現物
- 29) Sarrazins Vorstoß – eine Chronik, in: Sarrazin lesen, S. 4.
- 30) Eberhard Schultz im Gespräch mit Karlen Vesper, „Eine Gefahr für die Demokratie“, in: Sarrazin, S. 102–104.
- 31) Hilal Sezgin (Hrsg.), Manifest der Vielen. Deutschland erfindet sich neu, Berlin: Blumenbar, 2011.
- 32) Ex-BDI-Chef Henkel: „Die Mehrheit der Deutschen unterstützt Sarrazins Thesen“ (<http://www.schneider-breitenbrunn.de/2010-08/ex-bdi-chef-henkel-die-mehrheit-der-deutschen-unterstuetzt-sarrazins-thesen> : 2011年7月18日閲覧); nachrichten.lvz-online.de/f-Download-d-file.html?id=1076 (2011年7月18日閲覧); Sarrazins Vorstoß – eine Chronik, in: Sarrazin lesen, S. 4.
- 33) Necla Kelek, Die fremde Braut, Köln: Kiepenheuer & Witsch, 2005.
- 34) Necla Kelek, Ein Befreiungsschlag, in: Sarrazin, S. 32–40.
- 35) Necla Kelek, Professor Bade gibt den Anti-Sarrazin, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung, Nr. 107, 9. Mai 2011, S. 25.
- 36) Ralph Giordano, Wider die Kreidefresser, in: Sarrazin, S. 93–96.
- 37) Klaus von Dohnanyi, Feigheit vor dem Wort, in: Sarrazin, S. 128–131.
- 38) Clement stellt sich hinter Sarrazin (<http://www.bz-berlin.de/aktuell/berlin/clement-stellt-sich-hinter-sarrazin-article970543.html> : 2011年7月18日閲覧).
- 39) Giovanni di Lorenzo/Helmut Schmidt, Verstehen Sie das, Herr Schmidt, in: Die Sarrazin-Debatte, S. 91–93; Giovanni di Lorenzo/Helmut Schmidt, Verstehen Sie das, Herr Schmidt, in: Ebenda, S. 221–228.
- 40) Thea Dorn, Tribunal der Gutmeinenden, in: Die Sarrazin-Debatte, S. 170–175.

- 41) Hans-Ulrich Wehler, Ein Türkei-Beitritt zerstört die Europäische Union, in: Ders., Notizen zur deutschen Geschichte, München: Beck, 2007, S. 160–175.
- 42) Hans-Ulrich Wehler, Ein Buch trifft ins Schwarze, in: Die Sarrazin-Debatte, S. 150–154.
- 43) http://www.bundespraesident.de/SharedDocs/Reden/DE/Christian-Wulff/Reden/2010/10/20101003_Rede.html (2011年7月27日閲覧)。
- 44) Frank Schirrmacher, Ein fataler Irrweg, in: Sarrazin, S. 22–28.
- 45) 大衆動向を診断するのにアマゾンを用いることは当然ではない。インターネット上でも、各種掲示板、ツイッター、ブログ、フェイスブックなど、多様な発言の場が存在するからである。だがそれらはいずれも個人的なもので、また議論の全体像を把握するのが難しい。そこで本論では、すでに日本でも注目されたこの大手書店の書評欄を、一事例として利用することにした(宮本真也「慈善による寄付か、承認としての再分配か——「労働と承認」のサイドストーリー」、『ドイツ研究』第45号, 176頁)。
- 46) http://www.amazon.de/product-reviews/3421044309/ref=cm_cr_pr_hist_5?ie=UTF8&showViewpoints=0&filterBy=addFiveStar (2011年8月9日閲覧)。
- 47) Thomas Nipperdey, „Unter der Herrschaft des Verdachts“, in: Die Zeit, Nr. 47, 17. Oktober 1986, S. 12. 原語は *moralischer Absolutismus*。
- 48) ベルリン自由大学教授エティエンヌ・フランソワ(1943年-)の発言(講演「比較史と交差する歴史——ドイツとフランスの事例から」(2009年2月23日共立女子大学)後の討論で)。フランソワの論理でいくと、戸水寛人や美濃部達吉などは免職で「当然」だったことになるだろう。
- 49) 日本のドイツ学界で「六八年世代」を代弁してきた三島憲一(1942年-)は、「リベラル左派」対「保守派」という二元論を用いている(『文化とレイシズム——統一ドイツの知的風土』(岩波書店, 1996年))。三島は、ハーバーマス、ヴェーラー、ジョルダナーノら「リベラル左派のコンセンサス」が、ドイツでは「政府サイドのメインストリーム」になったと再三強調しているが(vi, 12, 197頁)、この事実認識は(価値的前提を異にしながらも)ザラツィンのそれと共通している。ただ三島は「リベラル左派のコンセンサス」が1990年代に徐々に動揺していく様子を(苛立ちながら)描写しており、それは「知的戒厳令体制」の動揺という筆者の事実認識と共鳴している。
- 50) <http://www.spiegel.de/politik/deutschland/0,1518,723532,00.html>(2012年1月16日閲覧)。
ザラツィン論争後の移民への統合圧力強化については以下でも指摘がある。前田直子「ドイツ移民統合政策のゆくえ——ザラツィン論争をきっかけとして」、『獨協大学ドイツ学研究』第64巻(2011年), 79—87頁。
- 51) 筆者はミュンヘンで各政党の集会に参加する機会を得たが、欧州債務危機に直接関

係するものとしては、2012年10月10日ミュンヘン・ホーフプロイケラーでのユルゲン・トリッティン（緑の党）講演「もっとヨーロッパを」、2012年10月17日バイエルン・カトリック・アカデミーでのヴォルフガング・ショイブレ（CDU）講演「ヨーロッパはその欲望ゆえに失敗するのか?」、2012年11月28日国立エジプト芸術収集館でのユリアン・ニダ＝リュメリン（シュレーダー赤緑政権文化担当大臣・ミュンヘン大学哲学教授・講演会企画者はSPD）講演「ヨーロッパよ何処へ」があった。本文にあるような意見の相違こそあれ、共にヨーロッパ統合支持、ユーロ維持、ヨーロッパ・デモクラシーの強化を力説する内容であった。特にニダ＝リュメリンの場合は、日本やアメリカ合衆国の（特に前者の）巨額の財政赤字を強調することで、ヨーロッパの危機を比較的軽微に見せるという論法が用いられていた。但し唯一、ヨーロッパ問題を主題とはしていないが、2012年10月24日アウグスティナー・ケラーでの元バイエルン自由国発展・環境問題担当大臣ベーター・ガウヴァイラー（CSU・講演会企画者はユンゲ・ユニオン・ミュンヘン）の講演「バイエルン史から未来のために学ぶ」では、「我々の資金を我々の手の届かないところで、EUのような抽象的で匿名のもののために使われてなるものか」という訴えがなされ、聴衆の喝采を浴びていた。

ちなみに筆者はトリッティン講演後の一般討論で、二つの問題提起を試みた。

〈今野の質問1〉講演者はヨーロッパ統合の深化とヨーロッパ・デモクラシーの強化を共に危機克服の手段として力説するが、両者は矛盾するのではないか。従来国民投票などで統合強化反対の結果が数多く出ている。デモクラシーを強化すればヨーロッパ統合が進むと思うなら疑問である。

（トリッティンの回答1）確かにオランダのようなEC創立メンバー国でも統合反対の右翼ポピュリズム政党が擡頭しているが、ドイツは幸いそういう政情ではない……（以下別の文脈へ移行）

〈今野の質問2〉ドイツ人はヨーロッパを半ば神のように称えている。だがヨーロッパの歴史も、我々非欧米人から見れば、ドイツの歴史と同様過去の重荷を負っているのではないか。ドイツ人としては自己批判的だが、ヨーロッパ人としては全く自己批判をしないというのはいかかなものか（会場係が質問を打ち切らせようとしきりに背後から介入。他の聴衆からは「日本だって過去の重荷を抱えているじゃないか」という野次）。

（トリッティンの回答2）ヨーロッパ連合は妥協の産物で完璧ではないが、経済的利害で軍事対立をしていた過去よりはましである……（以下曖昧な返答）

更に筆者は、ニダ＝リュメリン講演後の一般討論でも、以下の問題提起を試みた。〈ニダ＝リュメリンのテーゼ〉ヨーロッパ統合を成功させるためには、経済的問題を解決するだけでなく、ヨーロッパの文化的基盤を強化する必要がある。いまはそれが

貧弱で、全てがアメリカ合衆国に集中している観がある。フランス人はドイツ語を学ぼうとせず、英語に興味を示しており、ドイツの大学にはフランス人でなく東欧系などの学生が多く集まっている。

〈今野の質問〉ヨーロッパの文化的基盤が薄弱なのは、従来のナショナルな文化を否定してヨーロッパ標準で均質化 (Homogenisierung) しようとしているからではないか。世界的に見てヨーロッパの文化が最も発信力を誇っていたのは、帝国主義の時代、国民国家同士が切磋琢磨 (Auslese) していた時代である。ヨーロッパ統合の時代にも、ナショナルな文化が各々の矜持を失わず、互いに切磋琢磨すれば、それが延いてはヨーロッパ全体の文化的求心力も押し上げるという風には考えないのか。

〈ニダ = リュメリンの回答〉ヨーロッパ内での競争が必要なのは確かだが、それは国民国家間ではなく、(より下位の) 地方間で行われるべきである。

52) <http://www.sueddeutsche.de/medien/tv-kritik-guenther-jauch-ueber-guenter-grass-junge-duspinnst-1.1333442> (2012年10月22日閲覧)。

53) 筆者がミュンヘン滞在中に属していた現代史研究所 (Institut für Zeitgeschichte : 連邦とバイエルンなど各州との共同出資の歴史学研究所) では、『我が闘争』の注釈付の復刊が計画されている。筆者がアンドレアス・ヴィルシング所長 (ミュンヘン大学歴史学教授)、マグヌス・ブレヒトケン副所長などから聴取したところでは、同書の評釈付公刊は「頒布禁止を2015年以降も引き延ばすことが法的に困難である」、「頒布禁止にしていることが同書の神話化に貢献しており、学術的分析によりそれを防ぐことが可能になる」、「従来も同書を個人的に目にすることは完全に禁止されていた訳ではない」、「ヒトラー関連の演説や文書は皆公刊されており、同書だけが研究の穴になっている」、「同書の公刊に際し社会的に強い危惧があるとは考えていない」といった論拠に基づくものだという。なお現代史研究所の公式説明としては以下のサイトを参照のこと。
[http://www.ifz-muenchen.de/vollansicht.html?&tx_ttnews\[pointer\]=1&tx_ttnews\[tt_news\]=757&tx_ttnews\[backPid\]=18&cHash=0750c4a3e8](http://www.ifz-muenchen.de/vollansicht.html?&tx_ttnews[pointer]=1&tx_ttnews[tt_news]=757&tx_ttnews[backPid]=18&cHash=0750c4a3e8) (2012年12月27日閲覧)

54) <http://www.sueddeutsche.de/medien/tv-debatte-zu-hitlers-mein-kampf-bei-anne-will-dieses-bloede-buch-1.1347088> (2012年10月22日閲覧)。

55) Thilo Sarrazin, Europa braucht den Euro nicht. Wie uns politisches Wunschdenken in die Krise geführt hat, München: DVA, 2012.

56) http://www.focus.de/sport/olympia-2012/extremismus-debatte-nach-drygalla-fall-vesperdemokratiebekenntnis-ist-selbstverstaendlich_aid_795314.html (2012年10月23日閲覧) ; <http://www.zeit.de/gesellschaft/2012-08/cohn-bendit-drygalla> (2012年10月23日閲覧) usw.

57) Daniel Cohn-Bendit, „Das ist bigott und skandalös“, in: Die Zeit, No. 33, 9. August 2012, S. 4.

58) <http://www.focus.de/schlagwoerter/personen/d/nadja-drygalla> (2012年10月23日閲覧).

59) Ursula Sarrazin, Hexenjagd. Mein Schuldienst in Berlin, München: Diederichs, 2012.